

〔翻 訳〕

『スペクテーター』(42)

——第389号から第399号——

門 田 俊 夫

第389号 1712年5月27日（火曜日）

【バジエル】

われわれの敬虔な先祖たちは、われわれに
より良きことを教えてくれた。（ホラティウス）¹⁾

先だっのオークションで、『驕れる野獣の追放』²⁾ という小さな本についた価格ほど、イングランドの学識者たちを驚かせたものではありません。この本は30ポンドで売れたのでした。著者は、無神論を公言してはばからず、宗教を軽視する意図を持ったジョルダノ・ブルーノという人でしたので、誰もが、その法外な値段を聞いて、そこには何かとても恐ろしいことが書かれているに違いないと想像することになりました。

実を言いますと、私自身たまたまそれをちらっと見る機会がありましたが、その懸念を払拭できませんでした。だが、読み終わって見ると、何一つ危険なことは書かれていないことが分りましたので、読者の皆さんに、この素晴らしい論考がどのような考えから成り立っているのか思い切ってお伝えしたいと思った次第です。

著者によれば、かつてユピテルは星座の配置を改革しようと考えて、星たちを一堂に集め、神々への崇拝の気持が大きく衰退しているとの苦情を述べ、いくつかの天体に異教の神の名をつけ、これによって天界をいわば異教の神学書にしたということです。モモスはユピテルに向って、神々には数多くの醜聞があったので、何も不思議がられることはないのだと言います。そこで著者はほかのすべての宗教を考察し、ユピテルはしっかり聞き届けた後、天界から神々を放逐し、星たちに九天使の名をつけたのだと結論付けます。

この短い寓話には何らかの理性を主張をしようという点は何一つなく、あるのはわずかな機知だけですが、意見の特異性で目立つ無力な人たちにとっては、十二分に不信心とい

1) このモットーは実際はホラティウスではなく、*Auctio Davisiana* というタイトルの真面目でしかも滑稽な詩からとられた。作者は、後のプリストル主教であったアディソンの友人ジョージ・スモールリッジ。

2) このオークションはラドゲイト・ストリート近くのアヴェ・マリア・レーンにあるブラック・ボーイ・コーヒーハウスで1711年3月22日から4月末まで開かれた。ジョルダノ・ブルーノは1600年、異端者としてカンポ・デ・フィオーリ広場で火刑に処せられた。

うことになります。

しばしば無神論者たちに向って主張されますが、理解されることのない意見が二つあります。最初の意見は、あらゆる時代において最も偉大で著名な人たちは、それぞれの国で確立された公の枠組みが神の名誉を傷つけたり、人間の善に偏見を抱かせたりするようなことがない場合には、ことごとく無神論者を否定し、それに従ったというものです³⁾。

名高い神学者たちは言うまでもなく、古代ではプラトンやキケロ、現代ではペイコンやボイル⁴⁾やロックが、私が今述べている例にあたります。わが敵対者たちは、この件に関心を持ちすぎるために、公明正大な証人になれない人物として、こういった人たちに挑んでいるわけです。

だが、これよりももっと有力な意見として提出されたのは、これが単に教養人の意見であるだけでなく、この大いなる真理は人々から広く受け入れているということだったのです。私の考えでは、それはおそらくつぎの三つの理由から生じたと思われます。一点目は、神という観念は生得的なものであり、心そのものと共存しているということです。二点目は、これは極めて明白な真理であり、ごく普通有能力さえあれば誰でも少し考えるだけで分るという点です。そして三点目が、これはあらゆる時代を通じて始祖から代々言い伝えられてきたという点です⁵⁾。

こういった三点を耳にすると、無神論者たちは一様にまごつきます。彼らは人類の総意という三点目の主張には大変悩みますので、苦心惨憺したのち、無神論者の民族、つまり、ホッテントット族という礼儀正しい民族を見つけ出したと触れ込みます⁶⁾。

私にはこういった未開人の風俗習慣について述べて読者の皆さんに衝撃を与える勇氣は持ち合わせていません。彼らはあらゆる点でかろうじて獣より勝っているに過ぎないのです。彼らには言語はなく、あるのは彼ら自身も他の人たちも理解できない曖昧なペチャクチャというおしゃべりだけなのです。

いずれにしても、無神論者たちが友人や仲間うちでどれほど得意がっているか想像することはできません。

もし私たちが得意そうにソクラテスやセネカといった人を持ち出すと、彼らはそれに対しては偉大な哲学者ホッテントット族を持ち出すに違いありません。

当然、この点も何度となく否定されてきましたが、私たちが彼らを洗練された人間とみなさなければ、宗教には何ら危害を及ぼすことはありません。

同胞のいかなるグループも彼らに同調しておらず、同調している人たちの数も減少しかかっており、肩書きとしての形しか残っていないことほど、無神論の大義名分の弱点をさらけだしていることは他にはないように思えます。

3) 第186号参照。

4) ボイルの崇敬の念については第531号参照。

5) 第201号参照。

6) ジョン・マクスウェルはホッテントット族には神の概念がないと述べている（『哲学紀要』1707年310号）。

こういった気の毒な人々のほかに、いくつかの国で神の存在を否定する数少ない狂気じみた人たちの例が時々見当たります。

しかしながら、このリストは極めて短いものです。この大義のために闘ったことで名を馳せたヴァニーニ⁷⁾でさえ、裁判官を前にして、自分は神の存在を信じていると告白し、自分の前の地面にあった藁を拾い上げ、これひとつで自分に神の存在を確信させるに足るのだと言い、自然だけであらゆるものを作り出すことはできないということを証明するためにいくつかの主張を申し立てたのでした。

私は先日、ポーランドの紳士カシミール・リジンスキーに関する文書を読みました⁸⁾。彼は無神論の罪で有罪宣告を受け、処刑されました。この処刑方法はとても奇異なものでした。火刑にされるとすぐに、彼の遺灰は大砲に詰められ、タタール地方の空に向けて放たれたのです。

万一この処刑方法のようなことがイングランドで普及するようなことになれば、私たちがポーランドのように、無神論者を丸ごと大砲に詰め込んだり、不信心者を粉々にしたりするかどうかは別にして、私たちがそんな罪を犯すべきではないというのが、わが国民の良識だと信じたいものです。

とはいえ、私としては、わが弾薬が続く限り、わが国の不信心者たちをホッテントット族の国に打ち込むために、タタール地方ではなく、喜望峰に向けて準備した大砲を2つないし3つ用意しておくべきだと提案したいと思います。

私の考えでは、この種の馬鹿げた殉教で実施されている無神論者を爆破するやり方には、その罪の性質にふさわしいものであることは認めますが、厳粛な司法により死は無神論者にとっては過大な名誉なのです。

実際、無神論者たちに対するこういった扱いには大きな異議が唱えられています。宗教に対する熱意というものは非常に活発なものですので、留まることを知りません⁹⁾。そのため、無神論者を撃ってしまうと、つぎは非国教徒を撃ち倒すことを考えるのではないかと危惧します¹⁰⁾。人間の関心事の変化は想定できませんので、そのうちに、デミカルヴァリン砲¹¹⁾の砲口が必要になるかもしれません。

もし読者の皆さんが、こういった紳士に対する私の扱いがあまりにも馬鹿げているとお考えならば、私自身は、常識にショックを与える不信心者たちへの反論は彼らに過大な名誉を授け、世間に印象付け、彼らには実際以上の何かがあるのだと思わせることになると思っていますと認めざるを得ません。

何らかの宗教的な崇拜の大系を持っている人々に関しては、私は最大限の注意を払って

7) ヴァニーニ (1584? - 1619) はイタリアの聖職者だったが、自然主義的思想のために教会と衝突、最後には無神論者として火刑に処せられた。

8) ポーランド人カシミール・リジンスキーは、1689年、不敬罪をでっちあげられて処刑された。

9) 第185号参照。

10) 高教会派のトーリーは、無神論者も国教反対者も共に危険人物として扱った。

11) 口径約11センチの大砲。

接し、冷静かつ慈愛に満ちた気持で、彼らの過ちを指摘したいと思います。しかし、こういった異端者は、信仰一般に挑みかかり、人々から社会でとても有益なものを剥ぎ取ろうとしていますので、彼らに対処する最適な方法は、軽蔑と嘲笑という彼ら自身の武器でしっぺ返しをすることだと思います。

第390号 1712年5月28日（水曜日）

【スティール】

我々は恥じることによってではなく、そもそも
ふさわしいことをなさないことによってこそ、
恥知らずの名を避けなければならない。(キケロ)¹⁾

ご婦人方から受け取る手紙には、隣人を中傷し、率直で公平な振舞いに対して不当な解釈をするのが好きな恥ずべき人たちの監視下に置かれている苦しみを訴えたものが多くあります。彼女たちが自らの振舞いについてとても惨めな気持で綴っているところから考えますと、実際に彼女たち自身に疑念の元があるのです。他人の誤りを話題にして過ごすしか能のない人たちに影響力がないのは確かですが、それが実態であるとすれば、評判を気に掛ける人々は見かけが不利に映らないように気を配るべきです。中年や陽気な老年だけでなく若いご婦人方は、往々にして、手っ取り早く品位を保とうとし、せいぜい悪い事をしないでおくのが精一杯です。意地が悪いかおしゃべりな娘が、他人の立ち居振舞いをあげつらうようなことを言ったら、この人物は、かりに徒党を組んでいないとしても、この上なく危険なあら捜し屋となります。そこで、人々は慎みというよりはむしろ評判を守ることになります。それはまるで罪を犯したことではなく、責められていること自体に罪があるかのようです。オービシラは町で一番の心優しい人物ですが、この上なく慎み深い人物でもあります。彼女が羞恥心を失っていないのは事実ですが、潔白に対する自覚を失くしています。彼女がもっと自信を持ち、頬を赤らめるようなことを何もしなかったら、うしろめたさと潔白のお仕着せである曖昧な赤面をせずにすみ、慎み深くしていられるに違いありません。慎み深さは悪い事をしたことを恥じることにではなく、悪い事を何もしていないと自覚することにあるのです。心底からではなく、それ以外のよりどころから生じた振舞いであれば、それは瞬く間に醜聞を流す連中の掌中に収まってしまい、非難を恐れるほかの人たちもそれに同調してしまいます。他方、当然のことをやることが、中傷を沈黙させ、悪意を無力にする手っ取り早い方法です。スペンサーは、『神仙女王』の中で、非難され苦しんでいる若いご婦人方に見事に言って聞かせます。

私にアドバイスできることは、悪い事をする機会を避けることです、
と彼は言った。なぜなら、悪が発生する原因を取り除けば、

1) キケロ『弁論術について』1.26.120

その影響はびたっと止まるからです。
 快樂を慎み、したいことを控え、欲望を抑え、
 ふしだらな喜びを抑えるのです。
 減食し、たらふく食べるのは自粛するのです。
 隠し事を避け、率直にしゃべるのです。
 そうすれば、すぐに現在の窮地から抜け出せます²⁾。

かつてのエリザベス女王時代の詩人が推奨する言動への配慮をしないで、現代の作法は好きなように振舞い、しかも世界中で最も素敵な女性でありたいという訳です。父親や兄たちが婦人の純潔を守れば、純潔は保証されます。悪意にさらされて悩む女性たちの多くは無邪気ですので、日々お昼の正午まで眠って、2時まで関心を寄せることといえば身繕いのみで、2時から4時までの間に必要な食事を摂り、知り合いの家を訪問し、芝居を観に行き、翌朝までカードに興じます。そして、悪意に満ちた世間の人々は、無邪気な一瞥、ちょっとしたささやき、当世風の男性との打ち解けたからかいの言葉から、こういった女性たちは修道女ほど厳格ではないのだと推論します。確かに、ご立派な方々は、美德はごこない振舞いやしかつめ面にあるのではない、と言いますが、美德の習性が身についているご婦人の表情やマナーには品の良さが備わっており、振舞いにも慎み深いものがあります。こういったことは言われなくても理解できます。この種の若い女性は、好意と誉れが混じり合ったような評価を受けるに値し、中傷されることはありません。こういった女性であれば、手に負えない悪意もその乱されることのない粘り強い純潔によって打ちのめされます。率直に言ってしまうと、この町には媚を売る女たちの一団がいますので、ある種の抑制になっているのですが、女性たちの無礼なおしゃべりによって、平穏さが維持されなければ、彼女たちにまずまずの秩序を守らせる手立てはなくなってしまいます。

私は観察者であり、女性が女性の振舞いをどれほど明確にバランスをとっているか注視していますので、私は「告げ口屋」とか「中傷者」のことを頭に浮かべているのですが、大将がスパイ行為を止めないのと同様に、私は彼女たちを全面的に抑圧するようなことはしません。敵は自分たちの動きを知らなければ、相手方への奇襲は容易です。今のところ私にはほかに方法がありませんので、町の各地区に女性の中傷者を一人か二人置いておき、媚を売る女やほかの女性と自由にお付き合いをして、仲間たちそれぞれの振舞いに関する情報を私宛に送ってもらいたいと思います。

ところで、世間に対する関心という問題に関しては、持続していますが、一般的に徳高くあるという点については非常に簡単なことですので、その呼称を維持するために月に1時間熟考する必要はありません。奇麗ないたずらっ子たちが互いに徳とか悪徳とかについてしゃべっているのを聞くのは楽しいものです。正直言って、この上なく怠惰ですが、実に徳高い女性がいます。また、この上なく強情であばずれだが、美德に関しては非の打ち

2) エドモンド・スペンサー (c.1552-1599) 『神仙女王』 6.6.14

所のない女性がいます。知人に思いやりを一切見せませんが、厳格なまでに有徳の女性もいることを認めなくてはなりません。思慮に欠けた男性たちが、臆病でない人であれば誰でも名誉を重んじる人というように、女性たちもふしだらでなければ誰でも徳高いといえます。

第391号 1712年5月29日（木曜日）

【アディソン】

祈りなさい。あなたの祈りは天に届く。
 聞いて貰うために神々をそばに呼ぶ必要もない。
 一方、他の人々が、ローマの偉い人たちまでも、
 悪意に満ち満ちて、神殿にやって来る。
 小声でぶつぶつ言いながら、高価な香をたきながら、
 臆面もなく、秘密にしていたことを神々に大胆に打ち明ける。
 神々よ、どうか私にいい評判をお与え下さい。
 ならず者は人々の目にさらして下さい。
 そして、こっそりと、強大なユピテルよ、あなたはいつ
 私の裕福な伯父をこの世から連れ去ってくださるのか、と。
 ユピテルの子である偉大なヘラクレスよ、あなたは
 かつて気前よく、私の熊手を、地中に隠されている莫大な
 財産がちゃりんとうる音へと導いて下さった。
 私の弟子が公正に亡くなってくれたら。彼が亡くなれば、
 私はその財産を所有することになるのです。(ペルシウス)¹⁾

ホメロスは、アキレウスの家庭教師ポイニクスが弟子に向って、怒りを捨てて、同胞の嘆願に身を委ねるように説得したと描写しています。ホメロスは彼にふさわしい喋りをさせるために、老人たちが喜び、かつ、教育にふさわしい寓話を盛り込んでいます。ホメロスはつぎのように描写するのです。

「神々おん身ずからとて、折れて忍ばれることのあるもの、その稜威^{みい}も位^{くら}も、力さえ遙かにまさるが。その神々をすら薫香^{たきもの}や心をこめた誓願^の、あるいはまた飲料^{のみしろ}、または炙った肉の供物でもって、人間どもは祈り上げては、宥め和らげまつるがならない、過ちとか罪を犯した折には。それもすなわち祈願^{リタイ}の女神たちこそ、ゼウス大神の御娘ながら、足萎えで、皺^{あし}が寄り、両眼とも斜視^{やぶにらみ}でおわすというので、それ、アーテーの後からついて廻っては、世話を焼かれる訳だそう。アーテーの方は、力も強く、脚も達者で、それだからしてずっと先に、姉妹を置きざりにして駆^{かけ}ってゆき、あらゆる土地でその先を越し、人間どもに禍いをする、それで祈願は後から出かけ、後始末をつけてゆくのだ。されば、もしこのゼウ

1) ペルシウス『諷刺』2.3-13

スの御娘たちが、傍近くおいでたのを畏れ敬うときには、彼に大きな利益^{りやく}を授け、祈りも聞かれるのが常である。またこの神たちを蔑^{なみし}し侮^{あなど}り、素気なく追い卻^{しりぞ}けるような者には、(女神らが)クロノスの御子、ゼウスの御許^{みもと}へおいでなされて、その人間に迷妄^{アーテー}がとりつき、過ちをし出かしてから、報いを受けさすように頼み込む。』²⁾

この見事な寓話については説明する必要はほとんどありません。女神アーテーが危害とか罪とか神の正義とかを意味するといったことは説明する必要はありません。

祈りに関する異教の寓話をもうひとつ取り上げたいと思います。これはもっと愉快なものです。この一節を見れば、作者はルキアノスか少なくとも彼の書き方を模倣した誰かだと推測されます³⁾。この種の論考は有益というよりは好奇心をそそるものですので、著者が誰かについてはこれ以上詮索せずに、この寓話を読者の皆さんにお伝えしたいと思います。

「哲学者メニッポス⁴⁾ がユピテルから天に呼び寄せられたのは今回で二度目でした。今回はユピテルは気晴らしに足台のそばにある落し戸を持ち上げました。落し戸を上って行くと、哲学者をびっくりさせるような絶え間ない叫び声が聞えて来ました。哲学者がどういことですかと尋ねると、ユピテルはこれは地球から届けられたお祈りだと答えました。ユピテルの耳でしか聞き分けることができないほどの入り乱れた声の中で、メニッポスには調子も言語も様々に繰り返し繰り返し、金、名誉、長寿といった言葉が聞えて来ました。最初のガヤガヤという声が鎮まると、落し戸が開いていましたので、さらに別の声が聞えて来ました。最初の祈りはとても奇妙なものでした。それはアテネから来たもので、この謙虚な嘆願者はユピテルに知恵と髭を豊かにして欲しい頼みました。メニッポスはその声から嘆願者は友人の哲学者リカンダーだと分りました。この嘆願に続いて今ちょうど船に荷を積み込んだばかりの人物からの祈りがありました。この人物はユピテルが自分の祈りを聞き届けてくれて、財宝を満たして帰国出来たら、供物として銀のカップを差し上げると約束しました。ユピテルはいたずらに感謝しました。つぎにいつも以上に注意深く耳を傾けますと、エフェソスの寡婦のつれない気持ちを訴える声が聞えて来ました。この声は彼女の心に思いやりを育んで欲しいと懇願していました。この人物はとても誠実であり、彼からは沢山の香が届いている、彼にはやさしくして祈りを聞き届けてあげようと思う、とユピテルは言います。そこに、暴君を前にして臣下たちが一斉に放った君主の健康を願う誓願が飛び込んできました。大変な熱意と献身的な気持で捧げられたお祈りを聞いた後で、この同じ人たちから、暴君ぶりについて苦言を呈し、彼の威嚇を止めさせて欲しいと願っている小声のささやきが発せられるのを聞いて、メニッポスは啞然としました。ユピテルはこういった曖昧な不正直さをあらわにする連中に気分を害し、最初の誓いは無視し、後半の誓いは吹き飛ばしてしまいました。大きな雲が上方に立ち昇り、落し戸に向ってまっすぐ進んでいるのを見て、メニッポスはユピテルにどういことですかと尋ねました。ユ

2) ホメロス『イーリアス』9.499-512

3) アディソンはルキアノスの模倣が巧みだった。

4) メニッポスは紀元前3世紀のギリシアの犬儒派の哲学者。

ピテルによれば、これはある軍隊の大將から捧げられた生贄の牛100頭の煙とのことでした。この大將は立ち向かってくる敵十万を壊滅させて欲しいと執拗にお願いしていたのです。何とこの恥知らずな卑劣漢はこれだけ大勢の人々を、いやはや己の誉れのために、私が犠牲にすると信じ込んでいるのです。でもいいですか、私は危険にさらされているときしか聞き届けません、とユピテルは言います。イオニアの海で難破にあっていないのはならず者です。私は彼が態度を改めると約束したので、ほんの3日前に彼を助けてあげました。この卑劣漢には一文の価値もありません。だが、厚かましくも助けてくれたら神殿を提供すると言うのです。だがその向うに、特別な若者がいて、自分に財産を隠している父親を苦難に満ちた人生から救ってやって欲しいと懇願しています。若者の心痛に対して、私は老人は心の痛みが分るまで生かしてあげる、と言います。この後で、信心深い夫人の物静かな声が聞こえて来ます。彼女は皇帝の目に自分が素敵で魅力的に映るようにして欲しいとユピテルに懇願しています。哲学者がこの奇妙な嘆願について考えているとき、落し戸から穏やかな風が吹いて来ました。彼は最初、その風はゼピュロスのそよ風かと思いましたが、あとから、それは弱々しいため息だということが分かりました。花や香の強烈な匂いがしました。その後から、傷と苦痛、砲弾と矢、残酷、絶望と死のとても激しい訴えが続きました。メニッポスは、この悲嘆に暮れた叫び声は何か大きな殺傷行為があったためか拷問を受けている気の毒な人々の声かなと思いましたが、ユピテルは、これはパ波斯島からの声であり、恋人という異様な種族から同種の訴えが毎日届けられるのだと言いました。ユピテルによれば、男女ともこの世代の人たちに弄ばれており、聞き届ける届けないは別にして、彼らを喜ばすことは不可能だと分かっていますので、西風には今後、これらの通路を遮断して、地球に向けて適当に押し返すように命ずる積もりだということです。私が聞いた最後の嘆願は、ほぼ百歳になろうかという老人からのものでした。あと1年寿命を延ばしてくれたら、満足して死ねるというものでした。これは類まれなお年寄りだ、とユピテルは言います。20年以上にわたって連続して祈っているとのことでした。彼が50歳の時には、息子が独り立ちするのを見るまでは生きたいということで、願いをかなえてあげました。つぎは、娘に対しても同じような願いがあり、その後では、孫が教育を受けるところを見たいというものでした。これがすべて終わると、建築中の家が完成するまで生きたいと言います。要するに、この老人は聞きわけがなく、口実には事欠かないのです。私はこれ以上彼の言うことには耳を貸しません。そう言うと、ユピテルは怒って落し戸をボタンと閉じてしまい、その日はそれ以上耳を貸さないことにしました。」

この寓話には無思慮なところがありますが、寓意そのものは注目に値します。ここには、このテーマについて見事な風刺をしたユヴェナリスやペルシウス⁵⁾は言うまでもなく、ソクラテスやプラトンが説いたものと同種のものが伺えます。神に対して捧げる数多くのひそかな崇拜だけでなく、自然な祈りである人々の願いの虚しさといったものが十分に露呈されています。お祈りをするには様々な理由がありますが、愚かで過度な願望を抑制し、

5) ユヴェナリス『諷刺』10、ペルシウス『諷刺』2

荘厳なお祈りの場面で馬鹿げた嘆願をしないということが大切である、と私は考えています。

第392号 1712年5月30日（金曜日）

【スティール】

自由で恐れを知らない精神は、星の輝く柱に登り、
魂はあらゆる道を辿り、神々と交わる。(ペトロニウス)¹⁾

観察者殿へ

姿身に映ったフィデリオの変わった姿

私は最近お茶の席に出ましたが、その席では数名の若いご婦人方が近所の媚を売る女性について話題にしていました。その女性は鏡の前で稽古をしているところを見つけられたのでした。機知のあったものが悪意に変わりそうになった話題を変えるために、その家のご夫人は、男性たちの中に、体だけでなく心を飾るために相談のできる忠実な監視員がいればいいのにと言いました。誠実な友人が姿身で奇跡的な変貌を遂げれば、何度も助言を求めることを恥じ入る必要はなくなります、と彼女は付け加えました。この風変わりな考えが一晩中私の頭に残りましたので、とても奇妙な夢を見てしまいました。

思うに、私が鏡の前に立っていると、率直で無邪気な容貌の若い人の像が鏡に現れて、甲高い声でつぎのように話し掛けて来たのです。

あなたの目にしている姿身は、これまで男性、実は、不幸なフィデリオだったのです。私には兄弟が二人いて、姿の醜さは明晰な知性で相殺されました。しかしながら、（よくあることですが）それぞれの気質には体のゆがみにふさわしく、ひねくれたところがあったことは認めなくてはなりません。年上の方はお腹が異常にへこんでおり、大変な臆病者でした。彼は気難しいためにすぐにかっとなりましたが、実際よりも大きく見えるようにしました。それに対して、弟の方は胸が分厚いレリーフのように膨らんでおり、あらゆることをけなすことが大好きで、兄とはまったく逆でした。この奇態に皆は一二度は面白がるのですが、度重なりと愛想を尽かしました。そのため、若い紳士たちは宮廷から派遣され大学で数学を勉強することになりました。

お伝えする必要はありませんが、私は釣り合いも取れており、明るく礼儀正しい紳士との評価を受けました。私はすべての女性たちのお気に入りでした。年を取った嫌な人たちが私の悪口を言ったとしても、誰もがそれは私が彼らにお世辞を言うのを潔しとしないからだということが分かっていました。舞踏会にしても集いにしても、私がいないと始まりませんでした。フレイヴィアは私の前では髪を染めますし、シーリアは歯を見せますし、パンシアは胸を波打たせますし、クレオーラはダイヤを見せびらかします。クロエの足を見たことがありますし、ロドペーの靴下留めを器用に結んだこともあります。

1) ペトロニウス『サチュリコン』118 ペトロニウスは1世紀のローマの風刺作家。

一般的な格言に、「自己を溺愛する人は他人に激しい愛情を抱くことはない」というのがあります。しかしながら、女性たちの私に対する情熱は、自分たちへの愛情に比例しています。このことはナーシサスとの関係で立証されました。彼女の私への愛情は変わりませんでしたので、もし私がもっと小柄だったら、彼女は靴下留めに私をぶらさげたことだろう、と面白おかしく言われたものです。私の最も危険なライバルは陽気で軽薄な人物でしたが、ナーシサスとの長期に渡る付き合いと彼の生来の資質とがあいまって、彼女と瓜二つに変身していたのです。彼がしばしば事の成り行きについて私の意見を求めていることを彼女に気づかれなかったら、私は見捨てられていたに違いありません。彼女はそのことに気づいていましたので、私を一層無視できなくなったわけです。

私はいつも婦人方から優しく扱われましたが、婦人方が私をととても大事にしますので、私は男性から妬まれることはありませんでした。ある日、ナーシサスの嫉妬深い恋人は、彼女がなまめかしい会話をしているのを目撃したと思いました。彼は何も聞えないほど離れていたのですが、彼女の雰囲気や身振りから妙な事を想像したのです。彼女は時々落ち着いた表情で、耳を傾けようと後ずさりし、あどけない笑みを浮かべました。気持を高ぶらせて威厳と高慢に満ちた表情を見せた直後、もの悲しそうに目を半ば閉じ、赤くなった顔を手で隠しました。ため息をつき、今にも倒れそうでした。気性の激しい恋人はあわてて中に入って行きましたが、そこには二人の寡婦の間の壁に背をもたせ掛けたフィデリオしかないことが分り、とても驚きました。

私の冒険譚を列挙しますと際限がありません。急いで、私にとっては生命、ナーシサスにとっては幸福に関わるお話をすることにします。

彼女は運悪く天然痘に罹ったのです。私は明確に彼女と会うことを止められました。彼女が病気を悪化させるのではないかと、今度会えば私は間違いなく罰を受けるに違いないと氣遣いました。彼女はベッドを離れることが許されるや否や、部屋からこっそり抜け出し、隣の部屋にいる一人っきりの私を見つけ出しました。彼女は夢中で恋人の元へ走って行きました。私が彼女を嫌がるのではといった恐れはどこにもありませんでした。どうしたことでしょう。私がこんな忌まわしい哀れな姿を見て、びくつき、ショックを覚えていると言うのを聞いて、彼女は怒りを爆発させたのです。彼女は怒りを募らせて後ずさりしました。そして、私が不遜にも繰り返すのではないかと様子を見ていました。タイミングの悪い彼女の情熱が醜さを増大させたのだと付け加えました。怒り、興奮し、取り乱した彼女はヘアピンを引き抜き、全力で私の心臓を刺しました。死にかかった私は誠実さを失わず、真実を述べました。もっとも言葉はきれぎれでしたが、非難がましくしかめっ面で、私は最後の最後まで、私を殺害した彼女の醜さをまねたのでした。

いつも彼女に付き従っており、運命の女神に取り付かれた私のような有益な召使の運命に同情したキューピッドのお陰で、私は、体は清廉潔白で、心も以前のままです。私は直ちに男の姿と別れ、愛想よく、洗練され、明るい人物となりました。そしてこの日までご婦人方の大のお気に入りとなっているのです。

第393号 1712年5月31日(土曜日)

【アディソン】

何か秘密で特異な喜びに襲われる。(ウェルギリウス)¹⁾

最近受け取った手紙に目を通していましたら、偶然、つぎの手紙が目に残りました。これはほぼ2年前に、当時デンマークにいた聡明な友人から届いたものです²⁾。

1710年5月1日、コペンハーゲンにて

拝啓

故国では野原も森もすでに春の盛りを迎えているに違いありませんが、当地は寂しく、些細なことにでも哀れを催し、不満を口にする季節が続いています。恋人たちは嘆き、傷口からは再び血が流れ出しています。温暖な地から離れている私もまた、心穏やかではありません。私が不安になっている理由を明らかにしますと、貴殿はおそらく、何を夢みたいなことを言っているのかと笑われるに違いありません。ですが、楽園とは正反対の地域に閉じ込められている私の不幸は真に迫ったものと思わざるを得ません。当地での季節はことごとく不快であり、この国は田園の魅力からすっかり見放されているのです。この2年間というもの、私は、鳥のさえずりも、小川のせせらぎも、風のそよぎも耳にしたことはなく、また、花咲く草地を目にしたこともありません。当地に吹く風はことごとく嵐であり、水もまた逆巻く大洋なのです。貴殿には、私の苦情の原因が深刻なことを考えている人間には軽薄で似つかわしくないと知らないでいただきたいと思います。なぜなら、森や野原や花々、さらには、川や泉を愛する気持は、女性が生まれる以前のごく初期から私たちの本性に植え付けられた感情だと思えるからです。

敬具

国を移動する願いがかなうなら、冬はスペインで、春はイタリアで、夏はイングランドで、秋はフランスで過ごしたい、と私は思います。四つの季節のうちで、美と喜びという点では、春に対抗できる季節はほかにはありません。この点に関しては、季節では春が、1日では朝が、人生の段階では若さが、これに当たります。イングランドの夏は、ヨーロッパのどの国よりも快適です。それはひとえに、イングランドの夏には春が大きく入り混じっているからです。気候は温暖で、清涼剤として頻繁に露が降り、雨が降るために、わが国の野原は終始気持ちよく、1年で最も暑い月は鮮やかな緑で覆われます。

自然が息を吹き返し始める春先には、鳥たちをさえずらせ、獣たちを喜ばせる動物的な喜びが、人々の心の中でそれと分るほど高まってきます。陽気な自然の光景を見て、見る人の心に浸透するあふれんばかりの密かな喜びをミルトンほど巧みに描写した詩人は他に

1) ウェルギリウス『農耕詩』1.412

2) ニコルスによると、この人物はおそらくアンブローズ・フィリップス(1674-1749)かデンマーク史を書いたモールズワース氏とのこと。子爵モールズワースの書は1694年に出版された。

はいないと思います。彼は『失樂園』で、2、3回、これに触れています。悪魔自身もほぼこれに気づいていると述べる文章の中で、彼は「春の喜び」という名前で実に見事に描写します。

黄金色に輝く花と実とを同時につけた見事な樹々の環状の列が、
多彩かつ華麗な色ととけあって燦然と輝いていた。

そこには太陽が、美しい夕焼け雲に、あるいは、神が地上に
恵みの雨を降らせ給うたときに現れるあの虹に、注ぐ際よりも
遥かに楽しげにその光をそそいでいた。

それほどこの場の風景は愛すべきものであった。

サタンが近づくにつれて、さなぎだに清冽な空気はいよいよ
清冽なものに感じられ、あらゆる悲痛な思いを打ち払うにたる
うらかな春の日の楽しさと喜びとを、ひしひしと彼の心のうちに
呼びさました、——ただ、絶望だけは依然として残っていたが³⁾。

被造物の虚栄、この世のあらゆるものの不毛さ、さらには、確固とした実体としての幸福を生み出すことは出来ないといったことを記した著者は数多くいます。この種の論説は官能的な快樂に耽る人たちにとって非常に有益ですので、物事の明るい面を提示し、私たちを取り巻いている無垢な気晴らしについて明らかにする思索は、陰鬱な気質の人たちにとっても有益なものとなるのは間違いありません。そこで、私は過日の土曜日2回にわたって、心の快活さを奨励しようとしたのです。そして今でも、私たちが置かれている宇宙全般を考えるのではなく、自分たち自身と私たちが依存する神について熟慮するだけでなく、本日ここで述べています特定の季節について考えてみようとしているわけです。天地創造は善良な人に絶え間ない喜びとなり、目にするあらゆることがその人の心を元気づけ喜びを与えてくれます。神は自然に非常に多くの微笑を植え付けていますので、ひどく淫らな喜びに耽っていない人なら必ずそこに密かな喜びの感覚を見つけることが出来ます。ダビデは、詩篇の何箇所かで、これまで私が述べた春の喜びをもたらし、晴れやかな心にしてくれる美しく心地よい光景を賛美しています。

自然哲学はこの天地創造の嗜好を蘇らせ、それを想像力だけでなく悟性にとっても喜ばしいものにしています。自然哲学は小川のせせらぎや鳥のさえずりや木立や森の木蔭に基づくのではなく、小川や鳥や森が仕える神のいくつかの目的とそれらに現れる神の知恵の不思議を考察します。これは目の喜びを高め、魂に信心に劣らない分別のある賞賛の念を育みます。

偉大なる神をこのように崇拝し、おそらくこの上なく満足のゆく洗練された瞑想に耽ることは誰にでも出来ることではありません。そこで、私は人が現在の季節から自然に抱く

3) 『失樂園』第4巻148行-56行。

喜びに関する小論を締め括るにあたって、誰もが十分な能力を持っていることを実践に移すようお勧めしたと思います。

読者の皆さんは、この自然に対する魂の喜びから教訓を汲み取って、この春の喜びをミルトンの言うクリスチ안의美德にまで高めて貰いたいです。この心地よい本能、つまり、天地創造の美から生じる密かな満足感、充足感といったものに鼓舞されていることが分ると、私たちはこれらの気晴らしの恩恵を受けている神のことを考えることになります。神は、手を広げ、この世を善で満たしてくれています。使徒は、私たちに現在の気質を利用し、その気質に特に一致した信心深い行為を接ぎ木するように教えています。さらに、悲しんでお祈りをする人たちそして喜んで賛美歌を歌う人たちに助言を与える教を残しています⁴⁾。自然の業を目にしたことで快活になると、それは感心な感謝の気持ちへの用意が整ったということです。心ははるか離れた密かな喜びで一杯の賞賛と感謝の祈りへ向うのです。これを生み出す神の目標について考えることで、魂は清められ、それにふさわしい価値が与えられます。こういった気持が習慣化しますと、あらゆる野原や森を崇拜の的にし、普段の散歩を朝あるいは夕べの捧げ物へと変え、それを機会に、魂を自然に晴々とさわやかにしてくれる一時的な喜びを犯すことのできない永続的な至福状態にまで高めてくれるわけです。

第394号 1712年6月2日(月曜日)

【スティール】

これらは子供、若い婦人、奴隷、および、奴隷に
そっくりの自由の身に生まれた人々にはまずまずだが、
思慮深い人々には決して賞賛されることではない、
というのは言い得て妙だ。(キケロ)¹⁾

私はこのところ日々のありふれた出来事だけでなく、非常に重要な事柄においても、お互いに行き来させ影響させ合う取るに足らぬ出来事に関心を寄せています。お分かりのように、国会議員選挙では、数多くの老婦人に挨拶し、無骨者と酒を酌み交わし、最底辺の人たちと対等に付き合うことがとても大きな影響を与えます。著名な人物になるには、おそらく、身を売り、卑俗なことに身を落すことが出来るかどうかはほかの何にもまして大切な要素となるでしょう。これ以外に、また、これよりも有益なことが思い当たらないければ、富および榮譽への道を突き進むためには、付き合っている人々の性癖を知り、あらゆる事柄に対するこの人たちの傾向を注意深く観察することから努力していくしかありません。そうすることで、安心感を得ることができ、たとえ相手が非常に高尚な資質を備えている人であってもその人物を喜ばすために、大きな才能あるいは美德を犠牲にする必要

4) 『ヤコブの手紙』第5章第13節。

1) キケロ『義務論』2.16.57

はありません。何らかの特殊な変装をしている自尊心は、(しばしば高慢な人自身にはそれは謎なのですが)、人々にとって行為のごく普通の原動力となります。その人が何を自慢しているかを知りさえすればいいのです。とりわけ、その資質を賞賛し、支持を得ようとする人物に対しては、必ず自分の方がその点では劣っているように見せなくてはなりません。スペインのある国務大臣について耳にしたか読んだことがあります。この大臣は、ラテン語を見事に使いこなし、しばしば自分で公文書を作成する君主に仕えていました。王は、この大臣の助言を得るとの口実で、実際は彼に称賛させようとの意図で、ある外国の君主宛の手紙を彼に見せました。この誠実な大臣は、忠実な助言者としてその手紙を読み、王がいくつかの表現で自身を拘束し過ぎていることに異議を唱えただけでなく、他の表現に変えたのでした。その夜の公文書の処理にはあまり時間がかかりませんでした。大臣は自宅に帰ると直ぐに、長男を呼び寄せ、一家はできるだけ早くスペインから消えなくてはならないと伝えたのです。彼が言うには、王よりも私の方がラテン語がよく分かっていると王に知られたからだとのことでした²⁾。

上流社会の人物におけるこの珍しい過ちは、立身出世をしようとするすべての人々にとって教訓となります。関わりのある人に対しては十二分な注意を払わなくてはなりません。なぜなら、常識を備えた偉大な人物以外は、自分の言うことには何もかも喜んで賛成し笑みを浮かべようとして周りに突っ立っている奴隷たち全員を、憤りを隠し、笑いを抑えて、眺めていることは間違いないからです³⁾。目上の人がどの点で冷笑しているのか分からないといった困惑の表情を浮かべて、言葉途中で喋るのを止め、謙虚な賞賛者の顔色をあてにしているのを目にするのは立派な喜劇的場面と言えます。ところで、この種の愛想は宮廷特有のものです。ほかの場所では、単なる表情や身振りの画一化というよりも相手にしている人たちに合わせることになります。田舎の生活を送っており、重鎮であるなら、お酒が飲める口であれば、健啖家であること、声が大きいこと、さらに、田舎の快活さを備えていることが大いに役に立ちます。ほぼ40年前に、実業家であるが、誰もが近づけないほど気難しく不機嫌なひとりのお年寄りがいました。この人物はあるコーヒーハウスの常連客でした。そこへ出掛けては、トリックトラックやバックギャモンでみなを打ち負かしていたのです⁴⁾。彼に取り入る方法は、最初に、彼の暇な時間にゲームをして馬鹿にされることでした。なぜなら、彼の自慢の種は自分が実業家であることは勿論、道楽者であることを示すことだったからです。どこでもそうですが、起源が王室にあったことから「へつらう」(making one's court)と言われているのですが、この種のご機嫌取りのつぎに、最も広く行き渡っているものに、育ちのよい人々からは「プレゼント」、低俗な人々からは「賄賂」と呼ばれるものを用いる方法があります。こういったことは、金の総額という形ではなく、銀行で合点の行く恋文の形の方が懇懇に伝えられると思います。だが、紙

2) 同様の話は『慎重ということ、又は良識人の手引き』(1702)に登場する。

3) ポープのアッティクス描写はこの箇所をヒントにしたと思われる。アッティクスとはアディソンのことで、ポープが『ドクター・アーバスノットへの書簡』(1735)の中で与えた名。

4) トリックトラックまたはティックタックはバックギャモンの原形。

幣やコインを受け入れないほど強情な人々に関しては、私は以前化学をかじったことがありますので言いますが、ある物質を滑らかにするために必要なものは、物質によって異なります⁵⁾。適切な方法を用いない限り溶解することはないのです。金や紙切れに左右されない徳は、液体ならごく自然に溶解します。如才ないバルバドスの人たちは、グレートブリテンに要請をするときには、権力者の陰口を叩く人たちに巧みにシトロン水⁶⁾を配りました。豊富なワインが、繰り返し繰り返しその価値が憤慨して拒絶されてきた重要な事柄でも日々功を奏しています。

プレゼント、賄賂といった様々な方法を列挙してみると、人々の気持の操縦は、善良な人の徳がどこか腐敗していると思えるほどのものになっています。これを真実と名誉に振り向ける何らかの方法を見つけ出さなくてはなりません。ある地位を得るために犠牲にしていまいますと、ごく些細な出来事で誠実を手放すことになり、ひいては自己の大半を見失ってしまうことになります。自己愛は一つの美德になります。これによって、善悪が嫌悪と是認の唯一の対象となります。他人を傷つける人は、翻って見れば、実際には、自身を傷つけていることになります。危害を自身に加えていることと変わりはありません。これが公平さに辿り着く唯一の方法だと思えます。真実と正しい理性の指示に従う人は、策略で過失に導かれることがあるかも知れませんが、決して罪に至ることはありません。

第395号 1712年6月3日(火曜日)

【バジエル】

現在の理性はかつての欲望だった。(オウィディウス)¹⁾

ローマの占い師は、カエサルに「3月15日に気をつけなさい」と言った。わが国の観察者は、田舎の婦人たちに「5月に気をつけなさい」と言います。占い師の警告は不幸にも無視され、カエサルの自信が自らの命を落とすことになりました。先月の悪名高いしくじりについては報告が届いていませんので、麗しきわが読者の皆さんには、私の助言²⁾をしっかりと聞いていただけたものと自惚れてしまいそうです。

私は最善の結果になるよう望んでいます、わが親友サー・ロジャーがよく言っているように、この時節は1年のほかの時期に比べて田舎の自堕落な若者を相手に治安判事として多忙になるのですが、5月の4週をしっかりと見届けるまでは、あまりはっきりとしたことは言わないでおきたいと思います。

また、ある婦人から2週間ほど前に届いた手紙のことを忘れてはなりません。彼女はこれ以上持ちこたえることができないようで、自分は最初から新暦³⁾で考えているので、5

5) スティールによる錬金術の実験についてはエイトケン1.141-5を参照。

6) シトロン水はバルバドス・ウォーターと呼ばれてよく飲まれた。この飲料はシトロンの皮から抽出したオイルにフランス産のブランデーを混ぜて作った。

1) オウィディウス『愛の治療法』10

2) 第365号参照。

月は外出しても構わないと私に伝えて来ているのです。

他方では、失恋した恋人たちから寄せられた数通の怒りの手紙から、私の助言は古い諺によれば「警告は警備」である女性たちにとって非常に有益だと信じる大きな根拠を得ています。

失恋したある紳士によれば、私がこの新聞を出す前だったら、百ポンド提供していただろうということでした。この紳士の恋人は5月の初めに自分の考えをはっきり説明すると約束していたのに、新聞を読むと、返事は6月に入ってからと言って来たとのことでした。

テュルシスによると、シルヴィアを散歩に誘ったら、観察者から禁じられていると言われたとのことでした。

マット・ミーガーと名乗る別の寄稿者は、恋人との朝食はいつもチョコレート⁴⁾ だったのだが、5月1日に彼女の元を訪ねたら、今までのもてなしが悪い方に大きく変わっており、それ以降緑茶が出て来ると不満が寄せられています。

この危険な季節については、婦人たちへの警告で始めましたので、締め括りにはお祝いの言葉を持って来て、彼女たちには幸福な解放の喜びを味わって欲しいものと心から願います。

彼女たちは今では、喜んで免れた危険を回想し、とても満ち足りた気持で自分たちを脅かした危険を振り返っているかも知れません。ちょうどそれは、以前曾祖母たちが試練をやり過ごした後で、焼けたすき刃⁵⁾ を回想したのと同じように。春の刺激は今では弱まっています。ミルトンの言う⁶⁾、夜鳴き鶯は「切ない恋の唄」を歌うのをやめ、花は落ち、花床は鎌で奇麗にされています。

今では、太陽がかに座にさしかかる今月の半ばくらいまでは、節度を持って利用するならば、女性たちがロマンスやチョコレートに戻って行くのを許可したいと思います。自信過剰と過剰警備以外には危険なことはありません。ギリシア軍が野営をしていた間終始警戒していたトロイア軍は、包囲が解かれ、危険が去ったと思ったとき、まさにその翌日の夜、ベッドの中で焼死したのです。また、地方によっては絶えず春があるように、女性の中には絶えず5月があるものもいることを言うておかなくてはなりません。ある意味で貞節に意識過剰な人たちがいますが、私としてはこれについてはこれからも引き続き考えて行きます。この人たちはメガネ越しに少なくとも5年男性を見ない限り、完全に危険を脱したとは思えません。ウィル・ハニコームがさかんに請合っているのですが、この種の女性は大厄年⁷⁾ を過ぎてしまうと、25歳の冷たい女性をさらうよりも簡単だということです。また、15歳の若い女性の愛を勝ち得ようと努力したが無駄だった彼の知り合いの道楽者は、最終的には、彼女の祖母と駆け落ちをして財を成したとのことでした。

3) 当時イングランドではまだユリウス暦を用いていた。大陸とでは11日遅れていた。

4) ロマンス、チョコレート、小説などの刺激物については、第365号参照。

5) エセルレッドの妻エマについては、第198号参照。

6) 『失樂園』第5巻41行。

7) 大厄年(63歳、81歳)については、第295号参照。

ところで、この思索の意図は、万年青年、万年娘⁸⁾を対象にしていませんので、再び、理性と美德の指図に喜んで耳を傾け、私の言うことを平然と聞ける人たちに専念したいと思います。潔白さを失った場合には、こういった人は自分を見る目が物悲しいものにならないを得ません。チャモントは妹のことをつぎのように美しく見えています。

彼女は大きく花開き、しとやかになり、
見た目にも美しくなりました。そこへ、
現れたのが残酷な略奪者だったのです。彼は
この美しいバラの花を切り落とし、美を奪い取り、
まるで嫌な雑草のごとく捨ててしまったのです⁹⁾。

他方、時宜を得た私の助言に従い、謙虚さのルールに添って暮らした人は、今、6月に咲くバラとなり、乙女の赤面と美しさがみなぎります。とはいえ、こういった女性にも、作戦で成功した大将にとって、冬営地で不意を襲われることは恥ずべきことなのだという事を考えて貰いたいと思います。折角努力して5月に守ったものを、他の月に失うことは、どう見ても恥ずべきことなのです。

女性の魅力としては、美德に取って代わるものはありません。純真さをなくしてしまえば、美は醜くなり、資質は軽蔑に値するものとなり、正しい作法は節度を越えたものへ、機知は厚かましきへと退化してしまいます。考えて見ますと、画家にしても彫刻家にしても、美德はすべて女性の形で表現しています¹⁰⁾。だが、誰かが女性に対するもっと几帳面な肩書きをつけるとしたら、それは謙虚さということになります。女性たちは誘惑に征服されるかもしれませんので、彼女たちを正反対の悪徳から身を守る仕事は聖職者にお任せしたいと思います。したがって、私としては、女性は本能に誘惑されるかもしれませんので、これに警告を発するだけで十分です。

第396号 1712年6月4日(水曜日)

【スタイル】

三段論法を復活させようとの意図で書かれた
かつての憶え歌はつぎの言葉で始まる¹⁾。

目下多忙を極めていますので、読者のお許しを得て、ほぼ半年前に受け取ったピーター・

8) 万年青年、万年娘の英語は the Ever-greens。OED での比喩的な使用例の初出は1878年。

9) トマス・オトウェイ (1652-85)『孤児』(1680)第4幕294行-302行。

10) アディソンの『古代のメダルについての対話』の中で、シンシオは「美德が一般にペティコートのからみで示されているのは、多分にして女性への大きな賛辞と思える」と語っている。

1) 三段論法を思い出させるために考えられた古い記憶術のための詩はこの言葉で始まっている。ジョン・ニュートン『イングリッシュ・アカデミー』第7部第4章(1677年編)参照。

ド・クワイアと名乗るケンブリッジの紳士²⁾の手紙を披露したいと考えます。この手紙はずっと手元に置いていたものです。最初どのように活用すべきかわかりませんでしたが、何度も読み返して見ましたら、やっこの手紙にはいくつかの奇想があることが分かりました。したがって、読者は一読しただけで分らなくても、がっかりなさらないで頂きたいと思います。

観察者殿

1712年2月3日ケンブリッジ、セント・ジョン・コレッジにて

拝啓

当大学における地口の独占は、大昔からセント・ジョン・コレッジ生の特権となってきました。そこで、しばらく前に「褐色を愛する男」³⁾と名乗る隣のコレッジの人物からの貴殿への手紙を読んで、私たちとしては、私たちの昔からの権利が侵害されていることに怒りを覚えざるを得ません。ところで、貴殿は公然と思案に思いをぶつけていらっしゃいますので、褐色の肌の女性に対するこの紳士の情熱が理論家の兄弟をそそのかしていることを大目に見ていらっしゃいます。これは彼が地口に流れていることを無意識に釈明しているに過ぎないのです。なぜなら、彼は高尚で洗練された学問に非凡な知識があることを自慢する人たちの一員であるからです。こういった種族の女性が征服してしまいますと、魅了されたインテリたちにとっても奇妙な変化が生じ、一般にこれまで別種の女性を目にすることで得られた考え方が大きく変化します。想像力は夜や悪魔といったほぼ陰にすぎない観念やイメージの寄せ集めで一杯になります。こういった描写は、悟性の光を圧倒し、悟性の力を闇に包み込んでしまいます。そして、非常に血色のよい顔色に憂鬱な色合いを付与します。この紳士はこれを褐色の研究と名づけ、拒絶すると通常ひどい結果を招くことになります。知性が薄明かりの中では、愛情は本来非常に才気縦横な感情ですので、犠牲者は愛すべき魅力的な女性に対して、機知を振り回して、時折、ぶしつけな言葉を投げ掛けることになります。そして、不幸にして、(ミルトン風に言うと)雑種のできそこないの機知⁴⁾、俗に言う地口につまずいてしまいます。議会が経験しているオリーブ色の女性たちと地味な色の男性たちとの異種間の結婚が、あまり有益な方策ではなく、強力で輝いており眼をくらまし、数多くの突飛な過ちや狂信を生み出している光の氾濫を和らげないかどうかについては、(確かに非常に有能な計画者であり、彼の神学大系と教法上の仕組みが私たち敬虔な学部生の間で信頼を得ている) T. W. 博士⁵⁾の意見を求めることはさ

2) ニコルスによると、第396号はこの愚かな手紙の書き手弁士ヘンリーの手紙とのこと。ジョン・ヘンリーはこの時20歳で、1709年にセント・ジョン・コレッジに入学し、1712年に卒業。彼は後に『ヒップ・ドクター』を編集し、日曜日には宗教的な、水曜日には政治的な説教をした。

3) 「褐色を愛する男」については、第286号参照。

4) 『失楽園』第2巻683行。第285号参照。

5) この人物はおそらくケンブリッジ、シドニーサセックス・コレッジのフェローのトマス・ウルストン(1670-1733)。

ほど間違ったことではないでしょう。この考えは、私たちの地口の起源、および、私たちのコレッジで昔から続いているその拠り所の発見に何らかの光明を与えるかも知れません。主として、褐色のジョッキで安物のベルチ⁶⁾を飲んでいて、さらには、ステインコート・ホールというある種忘れることのできない食堂の独特な臭いのせいに違いないとよく知られた例があります。というのは、彗星の尾のような台所の空気が火の周りにはほとんど留まらず、背後に行き渡り、上述の香しい容器にたちこめるからです。おまけに、こういった吐き気を催させる出来事に異議を唱える繊細な私たちが、お茶を飲み、批評と色事に名乗りをあげ、同様に、私たちのコレッジでの古の無邪気な気晴らしである地口を嫌悪しているのはそれ以上に注目に値します。結局のところ、私が地口の唱道者といった様子で貴殿に接触しているように見えるのはどこか馬鹿げているかも知れませんが、(貴殿はこのテーマに関する一連の論説⁷⁾でこの実践に対する批判を展開しておられましたが)、これを控え目に用いることは、率直な正説にこだわるのが異教に走らせないことになるのと同様に、機知における革新的な案や仮説に走らせないことに役立つのだとお分かりいただけると、貴殿は十分償われたと思われるものと確信します。もしW氏⁸⁾の研究がラムスやクラカンソープ⁹⁾の範囲内に留まっていたら、この学識ある情報通は、他のキリスト教徒と同様に、大洪水について聖書が申し渡したことを黙認していたでしょう。驚くべきL氏¹⁰⁾がシェイクスピアの短詩や駄洒落、(彼はこれについては無比の才能を持っていたのは間違いないが)、時折は頌詩やソネットではなく、歌の一節や短い歌を書くことで満足していたら、土間席にいる上品な紳士諸氏はしかめつらをして、つまらない状況、思考の貧困と衰弱、不自然な機知、ドラマの自然な組み立てをけなすことはなかったでしょう。

敬具

ピーター・ド・クワイア

第397号 1712年6月5日(木曜日)

【アディソン】

悲憤そのものがわたしを雄弁にさせた。(オウィディウス)¹⁾

6) ベルチとは品質の悪い濁ったビールの俗語。OEDの初出は1706年。

7) 第61号参照。

8) ニコルスによると、この人物はウィリアム・ウィストン(1667-1752)。彼の『地球に関する新理論』(1696)は、ニュートンとロックから賞賛された。1703年には、ニュートンの後任としてケンブリッジの数学教授となったが、1710年に異端として大学から追放された。

9) フランス人ピーター・ラムス(1515-1572)は、サン・バルテルミの大虐殺で死を遂げた。リチャード・クラカンソープ(1567-1624)は*Logica Libri quinque*(1622)の著者で、1677年には第4版が出た。

10) この人物については確認されていないが、ニコルスによると、シェイクスピアの改作をし、俳優でもあり劇作家でもあったジョン・レイシーとのこと。だが、この人物は30年も前の1681年に死亡しており、確かとは言えない。

1) オウィディウス『変身物語』13.228-9

ストア派の哲学者たちは、一般にすべての感情を放棄しますので、賢人が他者の苦悩に哀れみを抱くことを認めません。友人が困っているのを見たら、悲しげな表情を浮かべて、悔やみを言ってもいいが、悲しみが心からのものであるように見られないように気をつけなくてはならない、とエピクテトスは言います²⁾。この派のもっと厳格な人たちは、悲しげな様子さえ見せてはならないと言います。最も近い知人に苦難が降りかかったと聞いても、直ちに、それが自分に何の関わりがあるのか、と言います。苦悩の状況を悪化させ、不幸がつぎつぎに起こると説明しても、返答は依然としてそれはすべて本当かもしれないが、それが私に何の関係があるのだ、ということでした。

私自身は、思いやりは人間性を洗練し教化するだけでなく、ストア派の人たちが知恵の抛り所としている怠惰な幸福、人間に対する冷淡さでは出会う事ができない喜ばしく心地のよいものがあるとの考えの持ち主です。愛は最も喜ばしい感情ですが、憐憫は悲しみの度合いによって和らげられた愛にほかなりません。要するに、憐憫は寛大な同情だけではなく、一種の喜びを与える苦悩であり、人を結びつけ、共通の運命を持たせるのです。

修辞法や詩歌のルールを定めている人たちは、著者に可能ならば他者に悲しみを引き起こさせるように努力すべきだと助言します³⁾。その結果、自らの苦悩をしたためたものほど憐憫の情を掻き立てるものはありません。悲嘆にはこれに当然雄弁さが伴います。そして、そこには申し分のない想像力によって与えられるよりも感動的な感情がほとばしります。こういった時の自然は、技巧では与えることが出来ない無数の感情的な事柄を押し付けてきます。

このため、読者は、しっかり書かれた悲劇で遭遇する非常に苦心した台詞よりも、史実でしばしば遭遇する短い会話や文章に感銘を受けます。真実や事実は実際に真に迫ってきますが、虚構の場合は距離が離れています。私の記憶では、古今を問わず、ヘンリー8世の妻であり、エリザベス女王の母であるアン・ブーリンの手紙ほど心を動かされたものはありません。この手紙は彼女自らの手になるものとして、コットン文庫に現存しています⁴⁾。

女王アン・ブーリンからのヘンリー王宛の最後の手紙

拝啓

陛下のご不興と私の拘禁は、私にとってはまことに驚くべきことです。何と記したらよいのか、何と弁明をしたらよいのか、私には全く分かりません。陛下はある方（この方は陛下もご承知のように、私の旧敵です）を派遣し、真実を告白し愛顧を得るようにとのことですが、ご伝言を受け取るや否や、私は陛下のお心を考えました。陛下のおっしゃるように、真実を告白することで私の安全が手に入るのだとしたら、快く謹んで陛下のご命令に従

2) エピクテトス『便覧』16

3) ホラティウス『詩の技法』102

4) ピーター・ハイリン（1600-62）『イングランド教会改革史』（1661）第2部96頁。コットン文庫はサー・ブルース・コットン（1571-1631）が収集したもの、曾孫のサー・ジョンが国に寄贈した。

います。

ところで、陛下の哀れな妻の過ちが先行していますが、これを認めるとはお考えにならないでください。嘘偽りのないことを言いますと、陛下への敬意、献身という点では私アン・ブーリンほど忠実な妻はいませんでした。もし神および陛下にご満足いただけていたなら、私自身もこの名前と立場に喜んで満足できていたことでしょう。これまでいつかなる時も、私は心の高まりを忘れたことはなく、女王であることを受け止めてきました。だが、私の立場は、今ではご承知のように一変してしまいました。私を告発する根拠は、陛下のでき心よりももっと不確かなものであり、何か別の件を引き出すことなど出来なかったのです。陛下は低い身分の私をお選びくださり、妃つまり伴侶にしてくださいました。これは私にはもったいないことであり、望外の幸せでした。もし陛下が私がそのような名誉を受けるに値するとお考えでしたら、軽はずみなでき心も私の敵の理不尽な忠告があっても、陛下のお気持ちを私から引き離してはなりません。また、陛下にこの上なく忠実な妻と陛下の娘である幼い王女に、不実という汚点、屈辱的な汚点を負わせてもなりません。善良な陛下、どうか私を裁判にかけてください。でも、私を正当な裁判にかけるとき、私の不倶戴天の敵を告訴人および裁判官にはしないでください。そうです、私の真実は恥を晒されることを恐れませんので、裁判は公開の形でお願いします。そうすれば、私の無実が明らかになり、陛下の疑惑も晴れ、良心も満たされ、世間の人たちの卑しむべき行為も流言も止むことになるか、私の罪が公然と明らかにされるかのどちらかがはっきりします。その結果、神あるいは陛下が私にどのような決定を下そうとも、陛下は公然とした非難から解放され、私の罪は合法的に証明され、陛下は神および人々の前で、私を不実な妻として堂々と罰するだけでなく、すでに傾いている陛下のお気持ちに従うことが許されます。陛下は私が疑いを持っていることはご存知ありませんが、私にはしばらく前から分っていたのですが、私が現在の状態になっているのはある人のためなのですから。

だが、陛下がすでに私の処分を決めておられ、私の死だけでなく忌まわしい流言によって、意に添った幸福を享受しなければならないのであれば、私は、陛下の大きな罪、また、その手先となった私の敵を許してくださるようには神にお願いします。そしてまた、神が最後の審判の場で、陛下を召喚して、私への陛下の王らしくない残酷な扱いに対する厳しい釈明をさせないで欲しいと願っています。最後の審判の場には、陛下も私もやがて出廷しなくてはなりませんし、そこでは、(世間の人々がどのように考えようとも)私の無実が公然と認められており、十二分に明らかになっていることは疑いの余地がありません。

私の最後で唯一の願いは、陛下のご不興の苦しみを背負うのは私だけにしていただき、(私が理解していますには)私のために同様に厳しく拘禁されています無実のお気の毒な紳士諸氏にまで及ばさないでいただきたいということです。これまで引き立てていただき、アン・ブーリンという名前が陛下にお気に召していただいていたとするなら、是非この願いをお聞き届けください。そうしていただけますと、私はこれ以上陛下を煩わせることなく、陛下のご安泰を願い、陛下をお導きくさるよう、三一神に心からのお祈りを捧げたいと思います。5月6日、悲しみに満ちたタワーの牢獄より。

敬具

アン・ブーリン

第398号 1712年6月6日（金曜日）

【スティール】

要領と知恵によって愚か者になり、
規則によって狂人となる。（ホラティウス）¹⁾

この町の著名人にシンシオとフレイヴィアという人物がいます。この二人は、相思相愛の関係になって10ヶ月経過しており、お互いに偽名で手紙のやり取りをしてきました。誰某氏と誰某夫人は、ありふれた生活をしているだけでは、他の人たちよりも魅惑的な生活をするほどの高揚感を得られません。美しいセシリアが魅力的な女性たちの仲間内で異彩を放って以来、シンシオはひそかに彼女の賛美者の一人となりました。この3ヶ月間町で最も素敵な女性はレティシアでした。シンシオはそれまでは終始、フレイヴィアの前でどこちなく恋人の役割を演じて来たのでした。フレイヴィアはシンシオに盲目的であまりにも誠実な心の持ち主だったので、心変わりには何一つ気づきません。シンシオは昨日コヴェント・ガーデンの広場で物思いに耽り、別の人に心が奪われているのに、このままフレイヴィアに会いに行き、愛を告白し続けるとは何とひどい人間だろうと自分に言い聞かせていました。フレイヴィアに対して心変わりしているのは意志薄弱だからだ。引き続き愛し、愛を打ち明けられないなら、それはもっと大きな罪となるだろう。通例、結婚後に生じる冷淡な気持のままで結婚することは、身を滅ぼすことになるのは明白だ。おまけに、女性に対しても失礼この上ないことだ。実のところ、このように考えた彼は、彼女を怒らせる機会を作って、彼女との関係を断つ決意をしました。このように考えたとき、彼はウィル・コービーハウスで働いているボーイのロビンがそばを通り過ぎるのが目に入りました。知っておいていただきたいのですが、ロビンは恋文を頼むには最適の人物なのです。痩せていて、足は速く、顔つきは真面目で、分別も十分あり、町のことをわきまえているのです。彼は想像できないほど鋭敏な気質を発揮して、メッセージの内容が分っていてもそれをおくびにも出しません。彼がフレイヴィアにまずお願いしたのは、自分には妻と3人の子供がいて、保証しますがこの手紙は害になることではなく愛なのですが、もしこれを受け取ってもらえなければ、自分の家族は夕食抜きになってしまう、なぜなら、用事を済まさない紳士から褒美が貰えませんかとの訴えでした。そういうわけで、シンシオはロビンを利用するのが適切だと判断し、フレイヴィアの家に行き、彼女に呼ばれて、通りがかったのはシンシオかと尋ねられたら、最初はそれを認めず、しつこく迫られたら認めるようにとの指示をしました。町のこのあたりで、シンシオの意図に適った身なりのよい女性を見つけるのは簡単なことでした。ロビンが持ち場についたと思うや否や、シンシオは二頭立

1) ホラティウス『諷刺』2.3.271

て四輪馬車にひとりの女性を乗せてフレイヴィアの家の前を通りかかりました。ロビンは戸口でフレイヴィアのお手伝いと話をしており、シンシオは驚いたように窓を引き上げ、中にいる女性を隠しました。このことはすぐに中にいる主人のもとに知らされました。ロビンは紳士は自分の主人に似ていたと言わざるを得ませんでした。だが、主人だとすれば、中にいた婦人はきっと見かけたことがある主人の従妹だと言いました。そして、彼女は彼が目覚めるまで午前中ずっと待たされていたので、気の毒な女性だと思うと付け加えました。フレイヴィアはすぐさまつぎの手紙を書きました。ロビンはそれをウィル・コーヒーハウスに持ち帰りました。

1712年6月4日

前略

否定なさっても無駄です。この上なく下劣で不誠実なお方、手紙の持参人だけでなくわが家のお手伝いも貴方を見たのですから。

草々

傷ついたフレイヴィアより

シンシオはこの手紙を読むと、ロビンに彼女の表情はどうだったか、手紙を渡したら彼女がどう言ったかと尋ねました。ロビンが言うには、彼女はぶっきら棒で、もう一度やって来ても言うことは何もなく、男の人たちが目の前からいなくなって欲しいとのことでした。でも、お手伝いが出て来て、返事を持って行って欲しいと言うのでした。シンシオはつぎのように応じました。

1712年6月4日 午後3時

前略

お宅のお手伝いと手紙の持参人が何度も私を見たのは確かなことです。私としてはピケット²⁾で手がふさがっていますが、貴女の手紙にある「否定なさっても無駄です」の真意を是非とも知りたいものです。私は一晩中ここにいます。

草々

あっけにとられているシンシオより

ロビンがこれを持って引き返すと、フレイヴィアはつぎのように応じました。

親愛なるシンシオ

手紙を書いてからというもの、控えの間で行ったり来たりしています。かっとなって失礼なことをしましたが気を取り直しています。どうかお許してください。直ぐにでもいらっ

2) ピケットはカードゲームの一種、第198号参照。

して、貴方と女の方が1時間前に馬車で通り過ぎたことに抱いた嫉妬心を笑い飛ばしていただきたく思います。

草々

フレイヴィア

貴方はことの全容を聞かずに書きになり、思い違いをなさっているに違いないと思われるので、貴方のお書きになった手紙は開封しません。

ロビンは直ちに引き返しました。するとシンシオからの返事はつぎの通り。

6月4日午後3時36分、ウィル・コーヒーハウスにて

前略

光栄にも知り合った淑女と貴女の家の前を通り過ぎたのは確かです。彼女は私の縁故者で素敵な女性です。貴女の書き方そして貴女が私の手紙を開封しないといった私への侮辱を認めていらっしゃることはどこか不可解な点が伺えます。そして、貴女と日々を過ごそうと考えている者を脅えさせます。私は貴女には小さな欠陥がいろいろありますがそれでも貴女を賞賛するために生まれついたのです。

草々

シンシオ

ロビンは走って帰り、彼女の返事を渡しました。

まさにその通りです。貴方は6月4日午後3時6分にはウィル・コーヒーハウスにいらっして、私には小さな欠陥がいろいろあると思っていたのです。直ぐにいらっしてください。そうでないと、おそらく貴方にとって面白くないことを決心することになります。

フレイヴィア

ロビンは、彼女は自分に手紙を渡すとき非常に腹を立てているいるようでしたとの報告をしました。そしてまた、彼女から尋ねられたので、シンシオはただ時計を見て、かぎタバコをくゆらせ、手紙の上部に二言三言付け足したと答えたのだとの報告をしました。

さて、話は込み入って面白くなってきました。そこで、シンシオは和解出来ないほど遠ざけてしまうにはもはやこれ以上することはないと考えて、つぎのように書き記しました。

前略

私は貴女のやることを毛嫌いしています。貴女は私にとって面白くないことを決心することは出来ません。

草々

シンシオ

この手紙が届くと、2秒もしないうちに返事が戻って来ました。

前略

これが本音ですか？ 貴方は私を愛してはいなかったのです。貴方と一緒にいらした方が貴方の相手として最もふさわしい方なのです。私は貴方のことを軽蔑します。貴方のことは直ぐに悪党として憎むことになると思います。

草々
だまされ易いフレイヴィアより

ロビンはつぎの手紙を持って走って行きました。

前略

貴女が示す、目的を達成するときの信じ易さ、失うことを恐れたときの疑い深さによって、それにふさわしい振舞いをするのはとても難しくなってしまいます。

草々
シンシオ

ロビンはまたも手紙をひつつかみ取って返しました。

ウェルフォード様

もはやフレイヴィアでもシンシオでもありません。貴方を不平不満から解放してあげます。そして、貴方を永遠に私の目に入らないようにしてあげます。

アン・ハート

ロビンはこのお昼の仕事をしたことで1クラウン手にしました。フレイヴィアの受けた侮辱にセシリアが仕返してくれることを期待して、これを公表することにします。

第399号 1712年6月7日(土曜日)

【アディソン】

自らを顧みて隠れた欠陥を見つけようとする人は誰もいない。

(ペルシウス)¹⁾

社交界における偽善は、シティーの偽善とは大きく異なります。当世風の偽善者は、自分が実際よりも不道德に見えようとしますが、他方は徳高く見えようとします。前者は信仰心があるように見えるあらゆることを忌避し、自分では後ろめたいと思っていない多く

1) ペルシウス『諷刺』4.23

の犯罪的な色事に関わっていると思われようとします。後者は高潔の顔を装い、見せかけの信心深い態度の下に、幾多の悪徳を隠します。

しかし、この双方とも異なる別種の偽善があります。これを本日のテーマにしたいと考えます。私の言いたいのは、世間を欺くだけでなく、自分自身をも欺く偽善のことです。この偽善は、自分の心を隠し、自分が実際よりも徳高いと信じさせます。また、悪徳に身を入れず、悪徳すらも美德と思い違いをします。「だれが自分の過ちを知ることができませんでしょうか。どうかわたしを隠れたとがから解き放って下さい」²⁾ と言わんとしているのがこの致命的な偽善であり自己欺瞞なのです。

もし不信心を公言してはばからない人が最高度の妥当性も持ち、彼らを悪徳と愚行から改心させようとする道徳について記す著述家の努力に相当するとしたら、自分たちは徳の道を進んでいるのだと思いながら、死の道を歩んでいる人たちへの配慮と思いやりに対する権利をどのようにして主張できるのでしょうか。それゆえ、私は心の隠れた片隅に潜む悪徳を知るためにいくつかのルールを定め、読者が真の公平な自己認識に至る方法を示したいと思います。この目的のために定める通常の方法は、聖書で述べられているルールに基づいて自己検証し、私たちの生活が完成の域に達する行動をし、その教義を受け止める人たちの大いなる導き手であり指導者であると同時に永続的なお手本となっている人の生活と比較することです。この二つは主張してもし過ぎることはありませんが、すでに優れた多くの先達によって扱われていますので、私としてはこれには触れるだけにしておきたいと思います。

それゆえ、私は隠れた欠陥を見つけ出し、真の自己評価をするための方法を考えるに際して、つぎの方法を提案したいと考えます。

第一に、自分が敵にどのような人物と映っているかよく考えて見て下さい。味方は往々にして、事実上、私たちの心をうれしがらせるようなことを言います。味方は欠陥を見ないか、欠陥を隠してしまいます。そうでなければ、欠陥を取るに足らぬことだと思わせるように、表現で和らげてしまいます。一方、敵は厳しく探求し、弱点や短所をことごとく見つけ出します。そして、敵の悪意は非常に強烈な光を当てますが、概ね、言わんとすることには何らかの根拠があります。味方は美德を誇張し、敵は罪を煽ります。賢人は、前者の向上、後者の削減に向って双方に相応の注目を払うべきです。プルタルコス³⁾は敵から受ける恩恵について小論を書き、悪意がもたらす有益な成果の中でも、特にこの点について、非難されることで自分たち自身の最悪の側面を知って、生活における汚点や欠点に目を開かせてくれるのだ、と述べています。私たちは、こういった汚点とか欠点は悪意に満ちた監視者の助けがなければ気づくことはありません³⁾。

同様に真の自己認識に到達するためには、これに対して、自分は人々から与えられる賞賛にどれだけ値しているか、人々が褒め称える行為が賞賛に値する立派な動機から生じて

2) 『詩篇』第19篇第12節。

3) プルタルコス『倫理論集』89-90

いるのか、賞賛を受ける美德を本当に所有しているのか、といった点についてよく考えて見るべきです。他人の意見によって、自分自身を高く評価すべきか非難すべきか、また、自分自身の心に関わる風聞を世間の判断にさらすべきかといったことを考慮するなら、以上の点を内省してみることが絶対に不可欠です。

つぎに、非常に重要な点において自己を欺かないためには、疑わしい想定上の美德を重視してはなりません。そうしてしまいますと、立派で賢明な多くの人々と意見の違うことを評価することになる可能性があります。欺かれる可能性のある点においては、常に細心の注意を払って慎重に行動しなくてはなりません。過度の熱意や頑固さや何らかの党や意見に対する迫害は、優柔不断な人たちからすれば賞賛に値するように見えるかもしれませんが、人々の間に計り知れない災難を引き起こしますし、それ自体が高度に犯罪的です。しかし、敬虔で著名な多くの人々は、美德という口実のもとで途方もなく馬鹿げた行動原理が自分たちの心に根付くのを許しています。私自身は、一生懸命についてゆき、同時に無垢でいられるような公正で理性的な党は知らないとは認めなくてはなりません。

さらにまた、生来の気質、お気に入りの情熱、特定の教育、あるいは世俗的な利益や利点を促すあらゆることから生じる行為には十分に気づかうべきです。こういったケースでは、判断が簡単にゆがめられ、誤まった先入観が心にのしかかります。これらは偏見への入口であり、心は無防備にしてしまい、知らぬ間に幾多の過ちや隠れた欠陥が入り込んで来ます。賢人は理性以外の何ものかに導かれる行為に疑いを差し挟みます。そして、特定の気質、年齢、生き方に適合しているとか、快樂とか利益を促しているといったあらゆる疑わしい決意には、常に何らかの隠れた悪が潜んでいるのではと懸念します。

無限の知恵と正義の試練に耐えなくてはならない最後の審判日で釈明することになりますので、もし堅固で確固とした美德を備えた魂を確立するなら、何よりも重要なことは、入念に思考をふるいにかけ、心の奥まった暗いところまですべてを検証することです。

本日の紙面を締め括るにあたって、私が述べた二種類の偽善、すなわち、世間を欺く偽善と自らを欺く偽善は共に詩篇第139篇で実に美しく言及されていることを述べておきたいと思います。前者の偽善の愚かさは、神の全知全能についての意見によって述べられています。神の全知全能ぶりは、聖俗あわせて私が遭遇した最も気高い調子で祝福されています。自らを欺く後者の偽善は、最後の二節ではのめかされています。そこでは、作者ダビデが大いなる心の探求者に話しかけ、力強く嘆願します：「神よ、どうか、わたしを探して、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください」⁴⁾。

4) 『詩篇』第139篇第23節－24節。